

A 国 語

(50分)

答えはすべて 解 答 用 紙 に書き入れること。

【この冊子について】

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子に手をふれてはいけません。
2. この冊子の2～3ページは白紙です。問題は4～13ページです。
3. 解答用紙は、冊子の中央にはさまっています。試験開始の合図後、取り出して解答してください。
4. 試験中に印刷のかすれやよごれ、ページのぬけや乱れ等に気づいた場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
5. 試験中、冊子がバラバラにならないように気をつけてください。

【試験中の注意】 以下の内容は、各時間共通です。

1. 試験中は先生の指示にしたがってください。
2. 試験中、机の中には何も入れないこと。荷物はイスの下に置いてください。
3. 先生に申し出ればコート・ジャンパー等の着用を許可します。
4. かぜ等の理由でハンカチやティッシュペーパーの使用を希望するときは、先生の許可を得てから使用してください。
5. 試験中に気持ちが悪くなったり、どうしてもトイレに行きたくなったりした場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
6. 試験中、机の上に置けるのは次のものだけです。これ以外の物品を置いてはいけません。
 - ・ 黒しんのえん筆またはシャープペンシル
 - ・ 消しゴム ・ コンパス
 - ・ 直定規 ・ 三角定規一組 (10cm程度の目盛り付き)
 - ・ 時計 ・ メガネ
 筆箱も机の上には置けませんので、カバンの中にしまってください。
7. 終了のチャイムが鳴り始めたら、ただちに筆記用具を置いてください。
8. 答案を回収し終えるまで、手はひざの上に置いてください。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

※ 字数の指定のある問題は、テン・マル・カッコなどの記号も一字として答えなさい。

※ 答えは、すべて解答用紙の枠の中におさまるように書きなさい。

□ 一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

埼玉県所沢市にある国立身体障害者リハビリテーションセンター学院の学生さんに聞いた話です。

事故などで膝から下を両脚とも切断した人のリハビリにプールで泳ぐというメニューがあるそうです。最初は水に入っても誰ものが短くなった大腿部を使ってバタ足をするそうです。ただし下脚がないバタ足では水をほとんど捉えられませんか推進力がほとんどない。水にプカプカ浮かぶだけです。しかしそうやって数時間あるいは数日間プールの水に浸かって動いているうちに変化が起こる。特に指導をしなくてもたいがいの人の身体はそれまでの上下動ではなく大腿部を左右に揺らすような動きになる。やがて魚が水の中を泳ぐような、背と腰をくねらせる水平運動がはつきりとあらわれてくるそうです。

たいへん驚きました。誰かが考えたとか教えたというわけではない。まったく新しい動きが現われてくるのです。水の中で動いてみることで、下脚のない全身はそれまでしたことのない動きを創造する。この動きは水にある「泳ぎを支える」性質の一つを示している。周囲の環境のなかには行動を可能にしているさまざまな性質があるわけです。行為することであらわになるこの「環境の意味」のことを、生態心理学では「アフオーダンス」といいます。英語の動詞アフード（与える）を名詞化した用語です。水には足で蹴る以外に、その中で身体を横に揺らすことで利用でき、動物の身体を推進する性質がある。いろいろなアフオーダンスがあるのです。

例えばロッククライマーは岩場の小さな凹凸が自分の体重を支えられるかどうかを見分けています。そのようにして選ばれた凹凸がクライマーの「垂直方向への移動」を支えるアフオーダンスなのです。そのまま動物の行為の可能性の一つを意味している。物と生きもののすることを同時に意味すること。それがアフオーダンスです。

スポーツの世界でも独特につくられた「環境」の意味を、アスリートの身体は究極まで探っているはずです。アスリートの身体と周囲の環境の接触面で開けてくる可能性、それがスポーツだと思います。（中略）

2 アフオーダンスがあるなと私が思えるようになった一つのきっかけがあります。ずいぶん前ですが、進行性の眼の病気で二〇歳ごろに失明した男性の歩行訓練に付いて歩いたことがあります。最初の課題はリハビリテーションセンターの屋内を歩き回ることでした。身体の両側へと杖を振り分けて床を叩き音をたてリズムを作りながら歩くような訓練を何日間もします。

なんとか自分一人で歩けるようになると、横に曲る小さな廊下がいくつか分岐している広い廊下を歩きながら、小さな廊下が横に抜けているところで止まるといふ訓練をします。

この男性は立ち止まって、抜けた廊下のほうに向き杖でそちの床を叩いて「こちらが抜けていますね」と言ったり、「向こうから風が来ました」などと言いながら交差している廊下を発見できました。なぜかわからないけど、はつきりあるという感覚が生じる前に、なんとなく顔が抜けている廊下のほうを向いているというようなこともありました。周囲のきわめて微細な音や風の変化に敏感になるためのトレーニングをしていたわけです。

しばらくして、いよいよ屋外の訓練が始まりました。建物のドアを開けて外に出るその男性の後に付いて私も屋外に出ました。その時です、建物入口の扉が開いた途端に、うわんと唸るような、どこまでも広がる音が外にあることを感じたのです。しばらく聞いているとその中にアイドリング中の車の音や少し離れたところを歩いている革靴の足音、100 mほど離れたところにあるテニスコートのボールの音とかが聞こえてきました。

ほかにもいろいろな音が聞き分けられたのですが、それよりも外の空気全体が唸るように、全身を包み、降りかかってくるような感じがして、街を歩くとはこういう音の中にあることなのだということをはじめて実感したのです。周囲の空気にはさまざまな出来事の振動が満ちている。空気中に満ちている多様な振動やその微細な変化を、失明した人たちは感じとっている。そして、自分が今どこにいるのかとか、周囲に何があり、何が起っているのかを発見している。この環境についてのきわめて無垢な感覚を研ぎすますことができてはじめて、単独で歩ける視覚障害者になれるわけです。

街の各所には独特な路の交差部の音や、街全体を包囲するような川や、街をつらぬく列車の音などがある。どの視覚障害者もそれぞれ生活しているところで、それらの多様な音を生活のために利用しています。失明するということは光を失うことですが、同時に振動の世界に深く触れることでもあるのです。

私の場合、この³失明者に付いて歩くという経験がスポーツへの興味とつながっています。

スポーツのどの種目も特殊な環境を過酷なたちで構築することで成立しています。ハードルがいくつも置かれた走路をできるだけ速く走り抜けること。急斜面をスキーで滑走し、そのまま空中に投げ出され、できるだけ速くへ飛び、転倒しないこと。高速の滑りをもたらしように磨かれた氷上を、薄い金属のエッジに乗って疾駆し、コーナーを減速せずに回ること。鎖の先に付いた重い金属玉を身体を急回転させて遠くへ飛ばすこと。直径4 m 55 cmの小さな円の中で体重が150 kg近い大男どうしがわずか70 cm間隔で思いつきりぶつかり合うこと……。日常ではあり得ない危険と困難に満ちた環境こそがスポーツと呼ばれる何かをつくり出しています。アスリートといわれる人たちはそこでの不自由さを十分に味わい尽くし、困難さのなかにあるわずかな光明、つまり不自由さの中

のわずかな自由を見だし、活かしきっている人たちだと思っています。その「絶壁の自由」こそがスポーツの醍醐味だと思っています。アスリートたちがその苦しみを歓喜に変えてしまう出来事こそがスポーツなのです。

(佐々木正人『時速 250 km のシャトルが見える』による)

問一 — 1 「与える」とありますが、ここでのリハビリの話において、具体的に「何が何に何を与える」のですか。次の「」

①③に入る適切な言葉を答えなさい。ただし、①は五字、②は七字で本文から抜き出して答えなさい。

「 ① 」にある性質が「 ② 」に「 ③ 」という行動を与える。

問二 — 2 「アフオーダンスがある」と私が思えるようになった」とありますが、筆者がそう思えるようになった理由を六〇字以内で説明しなさい。

問三 — 3 「失明者に付いて歩くという経験がスポーツへの興味とつながっています」とありますが、筆者にとって「失明者に付いて歩くという経験」と「スポーツ」はどういう点で共通していますか。「アフオーダンス」という言葉を用いて五〇字以内で説明しなさい。

二 「僕」(「堤」)は、小学校の時の同級生である「翔也」に街で声をかけられ、十五年以上ぶりに再会します。次の文章は、翔也の会社の事務所について行くことになった「僕」が、小学校時代のことを回想する場面から始まります。これを読んで、後の問いに答えなさい。

小学校の高学年だったと思う。父の転勤で、僕は滋賀の山奥に住んでいた。

人口の少ない町で、各学年多くて三クラスくらいしかなかった。そういう環境に引っ越してくる子どもは大変だ。どうしたって目立ってしまう。場の空気や子ども同士の上下関係を慎重に読まなくてはいけない。

僕は転校が多かったので、人の顔色を読んだり、当たり障りのない関係を築いたりするには長けていた。自分がどう見えるかということも、早い時期から把握していた。

けれど、田舎の空気はそれまでいたこの街より粘着質で保守的だった。人々は思っていた以上に細かい部分にまで注目していた。村と言っているようなその町に住んでいる限り、①イツキヨイチドウは人の目にさらされていた。そして、始終さまざまな噂が飛び交っていた。

僕の母親は息が詰まると、父にしばしば文句を言っていた。その気持ちはよくわかった。まるで、肺に少しづつ滓が溜まっていくようにだんだんと息がしにくくなるのだ。僕だけリコーダーの色が違ったり、自分が話している時に教室の隅で誰かが笑ったりする度に、②コキユウが浅くなった。標準語の発音が嫌みにとられないように、その方言を覚えるまではなるべく口数を減らした。

一度、異物だとみなされたら、もう終わりだった。テストですらわざとあまりいい点数を取らないようにしたくらいだ。1ただ、僕には一つ安心があった。それが、同じクラスの翔也だった。翔也も転校生のようにだった。

翔也には父親がいなかった。母親は出戻りだとか、大阪で水商売をしていたとか、いろいろな噂があった。不倫の末に子どもができてしまい、一人で育てられなくなり実家に帰ってきたとも言われていた。

翔也は色素が薄く、外見が目立っていた上に気も小さくて、喋るとすぐ声が裏返った。育ちのせいかは知らないが、遠足の時に蝶を追って迷子になったりと、一風変わったところのある子どもだった。何より、彼からは「可哀そうな」オーラが滲みでていて、子どもからすればそれは「苛めて下さい」と言っているようにしか見えなかった。正直、僕でさえ、もっとうまく立ち回った方がいいのと苛々したくらいだ。

ただ、確実な標的が他に一つあれば、こちらに矢が飛んでくることはない。僕は教室の片隅でぼんやりと窓の外を眺めている翔也を見ては、人知れずほっと息をついていた。

(中略)

僕らの学校の裏には小高い丘といった程度の山があった。そこは鬱蒼とした木々に覆われていて昼でも暗かった。一番奥には小さなお社があって、古ぼけた塚を祀っていた。

子どもたちは不思議だの幽霊屋敷だのと怖い話が好きなものだが、その森と塚は特に恐れられていた。

塚には鵺という怪鳥が封じ込められていると言われていた。昔、鵺は都を夜な夜な飛び回り、帝を悪夢で苦しめたので、③タイジされた。鵺の死体はうつほ舟に入れられて流された。その舟が流れついたのが、この町だと言われていた。祟りを恐れた人々は鵺を丁重に埋め、祀った。

けれど、人間を呪った鵺は夜になると闇から力を得て土から蘇り、森の中を叫びながら飛び回る。鵺に見つかってしまおうと鋭い爪と嘴で引き裂かれ、運良く逃れられたとしてもその鳴き声を耳にしたものは呪われて三日以内に悪夢を見て死ぬ。そう、まことしやかに語り継がれていた。今ならば、暗くなつてから森に入らないようにと、大人たちが作った嘘だとわかるのだが。

森にはカラスがたくさんいて不気味だった。いつでもぎやあぎやあと鳴いていた。なぜか奇形の犬や猫がよく捨てられていた。日が落ちた森の奥から恐ろしい鳴き声が聞こえてきたという子もいた。

僕はその伝説を聞いて育ったわけではないけれど、それでも、鵺の話一度でも聞いたなら充分なくらいその森はおどろおどろしい気配に満ちていた。委員会などがあつてどうしても帰りが遅くなる日は、校舎の中にもなるべく森の方を見ないようにした。黒々とした森が背後に迫りくるのを感じながら早足で帰った。

大人になつてから調べたら、鵺とは頭が猿で、胴が狸、尾が蛇、手足が虎のキメラのような想像上の生き物とあつた。僕らは恐竜図鑑で見た肉食の巨大な鳥を思い浮かべていた。僕は鵺の死体が入っていたという「うつほ舟」というものが妙に気になった。「うつほ」という言葉の響きに、ぼかんとした恐ろしさを感じたのだった。

翔也は絵や工作が好きで、よく一人でこっそり鵺の絵を描いていた。けれど、ひどい弱虫で、クラスの誰かに上履きや筆箱を森に投げ込まれたりすると昼間でも取りに行けず、靴箱の前に敷いてあるすのこに座り込んでいつまでも泣いていた。

正直、泣いた顔ばかり思ひだす。それと、伸びきったTシャツの襟元から覗く骨ばった鎖骨。その向こうで揺れる水面。カルキの匂い。

そうだった、思いだした。翔也と二人きりになることがあつた。プールの時間だ。

僕と翔也はいつもプールを休んでいた。僕は父の知り合いの医師に診断書を書いてもらつていて(注・「僕」は五歳のころに胸に火傷を負い、その痕を他人に見られたくないため、嘘の診断書を書いてもらつていた)、翔也はいつも水着を忘れてきて怒られていた。

翔也は泣き腫らした顔で、光る水飛沫をぼんやりと見つめていた。茶色い眼は虚ろで何を考えているかわからなかった。仲良くしていると思われて、苛めのとばっちりを受けたら嫌なので、僕は少し離れたところから呟いた。

「なんでさ、眼とか髪とか茶色いの？」

翔也はびくっと細い肩を震わして、おずおずと僕の方を見た。僕は顎で前を向いたまま話せと促した。翔也が慌てて前を向く。

「気持ち悪い？」

「そうは言っていない」

僕がぶつきらぼうに言うのと、翔也は少し黙って足元を這う蟻に視線を落とした。長い睫毛が影をつくる。

「父さんがハーフなんだ、もう会えないけど。だから、受け継いじやったんだって、母さんが言ってた」
「髪とか染めたらよかったんじゃないの？ 今更だぞさ」

翔也はなんだかいびつだった。個性的なパーツが無理やり細く青白い顔に収められていた。昆虫のような長い手足がアンバランスについている。そうかと思えば、睫毛や肌は女の子のようだった。そういうちぐはぐさが見まいとしても目に入ってくるのだ。鬱陶しいほどに。

「そんなことしても無駄だよ。結局どこを変えたって、この町で生まれ育った奴はぼくをよそ者として見るんだ。どこかしらに文句をつけてくる、ぼくがぼくである限り気に障るんだよ」

その気持ちはよくわかった。転校ばかりしていると受け入れられるのに必死で、本当の自分をいつしか見失っていく。けれど、どんなに自分を殺しても完全に溶け込むことはできない。

「確かにな」と小さな声で言うと、僕は水の中ではしゃぐクラスメイトを見つめた。2 どうして人って水に入るとあんなに声が高くなるのだろう。

ぶちりと小さな音がした。横を向くと、翔也が指で蟻を一びき一びき潰していた。

「ぼく、知っているよ。堤くんの秘密」

水音と甲高い音が遠のいた。心臓が耳の奥で鳴りだす。雲が晴れたのか視界が光で霞む。

「ちらっと見えたんだ。身体検査の時に。そんな顔しなくても大丈夫だよ。ぼくも同じようなものだから。ここにね、タトゥーがあるんだ。これだけは見られたくないから、プールをさぼってるんだ。父さん、タトゥー職人でさ、去年会った時にいれてくれたんだ、自分のことを忘れないようにって。でも、会ったことがばれて母さんが怒っちゃって。それで、もう会えない」

翔也は④シンセイな儀式みたいに胸の辺りをちよつと触ると、ぶちぶちと蟻を潰し続けた。

僕は何も言えずに黙ったままだった。

翔也が「安心した？ 秘密の交換だよ、絶対言わないでね」と笑った。笑顔のまま、そつと指の匂いを嗅ぐ。

「蟻の血って酸っぱい匂いがするよね」

白さを増した視界の中で、翔也の眼はガラス玉のように見えた。

鶴の死体が入っていたうつほ舟の「うつほ」とは、空っぽとかがらんどうを意味する言葉のことだったと、その時に気付いた。

(中略)

そう、僕は彼の秘密をばらしたのだ。

翔也がいけないのだ。泣き虫でグズのくせに、あんなものを作ってしまうから。

僕と秘密を共有したつもりで、いい気になっていたから。

プール学習の度に話しかけてくる翔也が疎ましかった。けれど、秘密をばらされるのが怖くてついつい言葉を交わしてしまった。

翔也はプールの時以外は話しかけてこなかった。からかわれたり、プロレス技をかけられている時でも決して助けを求めたりはしなかった。僕に気を遣っていたのだろう。自分の臆病さを見抜かれた気がして、苦い気分になった。確かに僕は皆の前で話しかけられたとしても無視しただろうし、間違ってもかばったりなんかしなかっただろうから。わかってるからこそ、苛立ちが募った。

プールに反射する光に目を細めながら、僕に笑いかける翔也が不気味に思えた。怖かったのだ、翔也が僕を恨んで秘密をばらしてしまうのが。助けてくれないことを責めもせず、笑っていられる翔也が何かを企んでいるように見えて気が気じゃなかった。

夏休みになって、あの色素の薄い目から離れると、やっと息がつけた。

けれど、休みが明けて教室に入った途端、僕は呆然とした。

見慣れない光景が広がっていた。

翔也の机の周りに人が集まっていた。

その真ん中には白い鳥の模型があった。小さく切った無数の割り箸で組み立てられていた。大きく羽を伸ばして、今にも飛び立ちそうに生き生きとしている。

いつも乱暴な男の子も口をあけて見惚れている。女の子たちは遠巻きにしながらも「何あれ、すごい、すごい」と騒いでいた。遠藤さんという気の強い女の子が「翔也、あんた本当に自分で作ったの？」と高い声で言った。

「そうだよ、そんなに難しくなかった」

翔也が小さな声で答えると、男の子の一人が「じゃあ、ヘリコプターとかさ、虎とかも作れる？」と訊いた。翔也はそつと頷いた。「すげえ」と歓声がわく。人に囲まれて背を丸めていたが、翔也は少し頬を上気させて明らかに得意そうだった。

翔也の作った鳥の模型は文句なく図画工作の最優秀賞に選ばれた。そればかりか、県の小学生コンクールに出展されることになったと担任の先生が言った。

僕は怖くなった。翔也は夏休みが明けてから一度も泣いていなかった。休み時間を使って、クラスメイトが頼んでくる模型を黙々と作り続けていた。木工用ボンドの酸っぱい匂いの中で、規則正しく手を動かす翔也はロボットのようだった。

このままでは、苛めが僕に回ってきてしまうと思った。その恐怖に抗えるものなんてひとつもなかった。

体育の時間の後だった。教室に戻ってきた翔也は後ろから羽交い締めにされた。

正面に回り込んだ子が体操服をまくりあげようとした。翔也は抵抗した。はじめてのことだった。金切り声をあげて、足を交互に蹴りだしながら渾身の力を込めて逃れようとした。蹴り飛ばされた子が大げさな悲鳴をあげると、わつとみんなが押さえにかかった。

翔也は蹴ったり殴られたりされると、すぐに床に膝をついた。

ぐったりとした体に手が伸びて、体操服が引きはがされた。

白く細い胸に、青黒い鳥が翼を広げていた。

歴史の教科書に載っていた壁画のような渦巻き文様の鳥だった。

一瞬、辺りはしんととなった。その鳥は濃い空気を放っていた。昼間の光とは⑤イシツな。

「鵪だ！」と誰かが叫んだ。

「こいつ鵪の痣があるぞ、呪われてるんだ」

周りにいた子が一斉に後ずさりした。

上半身裸の翔也は目を見開いたまま、首を振った。自分を取り囲む子たちの顔をぐるっと見回し、一番後ろにいた僕のところで見線止めた。突き上げられそうなほど虚ろな眼だった。僕は慌てて目を逸らした。

翔也は胸に描かれた鳥を抱くようにしてうずくまった。

その日から、翔也の存在は消された。もう誰も話しかける人はいなくなった。町では翔也の父親がヤクザがらみの人間だったとい

う噂がたつてしまい、大人たちまでが関わりを避けようとした。刺青のある子だから何をするかわからないと陰口が飛び交った。子どもたちの間では、翔也は恐ろしい鵠の呪いを受けているから、触ったり口を利いたりしたら不幸になると噂がたった。翔也の作った鳥の模型は壊され、机の中も靴箱の中もいつもめちやくちやにされた。下校中には石をぶつけられ、生傷が絶えなかった。それなのに、翔也自身は誰から見えていないように扱われた。給食当番もさせてもらえないし、プリントも回ってこない、手をあげても指名されることもなかった。

泣かされていた頃の方がまだ、ましだったろうと思う。僕自身もこんなことにまでなるとは思っていなかった。翔也はあの時以来、一度も僕を見ることはなかった。やがて、学校を休みがちになっていった。

僕はまた父の転勤が決まり、三学期にはもう違う学校に移ってしまった。最後の日も翔也の席は空っぽだったのを覚えている。

(中略)

「ねえ、堤くん、鵠の森に入った？」

何のことを言っている？ 乾いた唇をひらいたが、声がでなかった。翔也は構わず続ける。

「おれはね、入ったんだ。森は黒かったよ、夜の闇よりずっとね。でも、怖くなかった。母さんは神経がおかしくなっちゃって、学校も家も、おれの居ていい場所なんかなかった。だから、行っただ、鵠の塚の前に。命を捨てたいと思ったんだ。どうせなら、みんなが畏れるものに奪われたかった。4 そして、森で鵠を見た」

煙草の白いけむりが流れて、消えた。

「そう、おれは鵠を見たんだ。カラスの群れが一目散に逃げて、ぎやあぎやあ騒いでいたよ。鵠は恐ろしく禍々しかった。何よりも闇が似合っていた。ぬめるような空気を放っていた。おれみたいな中途半端なまがいものじゃない、完全なる異端だったよ。あまりに圧倒的で美しくさえあった。なあ、禍々しさやいびつさだって、極めれば充分に人を惹きつけるんだ」

僕は一步後ろにさがった。翔也の言っていることが、よく、わからなかった。

「わかんない？ 苛められていた頃、おれはこのタトゥーを彫った父さんならおれを理解してくれると思っていた。いつか、自分と同じ人たちのところへ行けると夢見た。けど、鵠を見た時思った。もう、一人でいいと。わかったんだ。どこに行っても同じなんだ。みんなカラスと一緒に怖いだけなんだよ。だから、必ず仲間外れを作る。共同体なんて、そんなもんさ。わずかな違いを見つけだされるのを恐れて生きるのなら、おれは一人でいい。恐れられる方がずっといい。鵠はずっと一人で、畏れられて、理解なんてされないんだ。けど、忌み嫌われてもあんなに堂々としていられるんなら、それでいい。そう思ったら目の前がひらけた。堤くん、ひらけ

た世界って見たことがないだろう？ 拒絶きょぜつされて、死の淵ふちまで行つて、そうしなきゃ気付けないものはあるんだよ。そして、君はそのチャンスを逃のがしたんだ」

翔也は立ちあがつて階段を降りてきた。

「おれはその時得たもので、今も生きながらえている。だからさ、おれは怖くないんだ。自分の恐怖心や闇すら覗けない奴なんか恐れない。周りと違つて言われても、そんなの当たり前だつて思えるんだ。たった一人になつても」

（千早茜「鶴の森」による）

問一 — 1 「ただ、僕には一つ安心があつた」とありますが、ここでの「安心」とはどのようなことですか。説明しなさい。

問二 — 2 「どうして人つて水に入るとあんなに声が高くなるのだろう」とありますが、ここでの「僕」の気持ちを説明しなさい。

問三 — 3 「大きく羽を伸ばして、今にも飛び立ちそうに生き生きとしている」とありますが、このように感じた「僕」の気持ちを説明しなさい。

問四 — 4 「そして、森で鶴を見た」とありますが、鶴を見る前と見た後で「翔也」の気持ちはどのように変化しましたか。説明しなさい。

問五 — ①⑤のカタカナを漢字に直して答えなさい。

このページより後ろは白紙です。

